

大学図書館問題研究会 京都

京都市左京区吉田本町 京都大学教育学部図書室 (竹村心気付)

TEL 075-751-2111 (内3013)

同志社大学図書館における目録の電算化

井上正則

(同志社大学図書館)

I 電算化の概略

同志社大学図書館では、1964年に分類改訂を行い、それ以後カード体目録と冊子体目録を作成してきた。カード目録は基本記入方式によるゼロックス複写のユニット・カードであり、副出はトレーシング(和書はヘボン式ローマナイズ)によって表わしていた。冊子体目録は3年キムレイト版を3巻、最新巻は5年キムレイト版で発行した。この最新巻を発行するのに2年の歳月を費やし、この2年間に最新巻の $\frac{2}{3}$ 程度の量が蓄積してしまった。又冊子体目録発行の費用も1千万円程度(人件費を除く)必要とする。このようにマニュアルで作成する冊子体目録は、発行それ自体が不可能になりつつある。さらに冊子体目録の効用は発行の度に逓減している。

このような現状の中で、業者委託による電算機による冊子体目録の発行という方針が出された。これが現在の目録の電算化の発端である。現在進行している目録の電算化は、カード目録の作成が中心であり、目録の機械検索のためのデータベースの蓄積及び、将来のネットワーク化に備えてのものである。フォーマットについては、和書・洋書・雑誌逐次刊行物の三部門に分け、各々JAPAN MARC・LC MARC・LC及びUNIMARCのフォーマットに準拠して作成した。

II 同志社MARCの特色

書誌データ入力の際は、入力費節約の為(特に和書・雑誌逐次刊行物)に原則として一度記入した文字は二度書かないようにした。すなわち記述に使用した文字は、アクセスポイントにも使用している。アクセスポイントには分類・書名・著書があり、書名と著書は漢字・アルファベット(和書はヘボン式ローマ字)・カタカナを持っている。カタカナについては、ヘボン式ローマ字を入力した時点で、電算機により翻字している。また中国の簡体字、キリル文字も入力している。(ハングル文字は検討中である。)

次に、ファイルとしては、雑誌マスターファイル以外に、著者と叢書名のファイルがあり各々オーソリティコントロールを行っている。すなわち著者については、過去の目録との関係から基本記入方式を維持しているために同一人物は同一形を採用している。叢書名についても同様である。(和・洋のカード目録を混排しているためでもある。)この2つのファイルは、将来の著者名検索、叢書名検索の重要なファイルでもある。又、参照カードの出力もこのファイルから行う。

さらに入力費節約の一環としてこの9月からはJAPAN MARC, LC MARC, 学総目の各テープからのテープトテープを行う予定である。これは各MARCの情報をそのまま同志社MARCにファイルするもの

である。(但しJAPAN MARCからは、記述部分のみである。これはLC MARCが著者名を個人・団体・会議体に区分しており、さらに生没年等の限定語の区分があり、同志社MARCもそれに準拠しているからである)

もう1つの特色は、記述のパンクチュエーション(洋書はAACR2によるピリオド・コンマ・スラッシュ・スペース等)、定形用語(内容、contents等)は、カード打ち出しの時点で機械的に付与している。従ってファイル内にはゴミと呼ばれる unnecessaryピリオド等は入っていない。

Ⅲ 問題点

目録の電算化も全ての問題点を解消してからスタートしたのではなく、目録規則(和書は新版予備版、洋書はAACR2)の整備等の根本的な準備が整わないまま4月からスタートした。以下、問題点をひろってみると、

まず検討期間が短かったことがあげられる。目録電算委員会が館内に発足したのが2年程前であるが、実際の活動は業者を決定した後である。すなわち81年3月頃からになる。しかも業者との打ち合せ・フォーマットの設計、入力要領等の作成は、和書・洋書・雑誌逐次刊行物の各1名(窓口と呼ばれている)が行った。この結果委員会のメンバーを含む館員の電算化への意識の高揚ができなかった。日常業務を行いながらの業者との打ち合せ、フォーマットの設計等、さらにはこれに伴う資料の作成等のために時間的余裕がなかったのだが、以下の問題の一要因となっていることに窓口の一人として責任を痛感している。

次に、入力費節約のためにデータシート記入上、種々の記号(例えば α , β , γ , δ , ϵ , ζ 等)を使用しているので、記入が若干複雑になっている。又過去の目録の延長線上に電算化が存在しているために、カタログにある種の拒絶反応を引き起こしたようになってしまった。

また電算化=省力化ではあっても、省人化には結びつかない(特にデータの入力部門では省力化にもなり得ない)し、より以上に人

手が必要なことは明白であるが人員増はなく、その結果整理の遅れと言う形で対処している。

(電算化によって省力化になるのは利用者である)以上は現実の問題点として存在しているが、慣れ等によってある程度解決できるものと思っている。

最後に私が現在最も大きな問題点と考えているものは、電算化であれ、マニュアルであれ変わりのないことかも知れないが、カタログガーの意識についてである。すなわち、誰の為に、何の為にカタログを作っているのかと仰うことである。カタログガーは資料を手にしてカードを探すのに対して、利用者はカードからその資料を見出すのである。このことは規模の大きな図書館ほど忘れられているのではないだろうか。カタログガーが資料を手にしてまず考えることは、この資料がどのような種類(小説・伝記・書誌・統計書等)のものであるか、次に書名は何か、著者は誰かを判断していく。そしてカードの記述はどのようにすれば良いかを考える。しかし利用者はどのような規則でカードが作られているかを知りたいわけではない。その図書館に自分の探している資料があるかを知りたいのである。そのためにはいかに多くの手がかり(アクセス・ポイント)を作るかに、カタログガーの使命はあると思う。ディスプレイにしろ、カードにしろ利用者の検索は、あいまいな記憶から始まることを常に考えていなければならない。(正確な記憶であれば、1枚のカードがあれば充分である)マニュアルでは副出をしつつ増やすことは、カードを1枚余分に作らねばならないし、ヘディングをする手間も大変であるが、電算機はそれらを簡単にやってくれる。プログラムに負荷をかけることによってトレーシングの手間も、少し減ずることができる。

今後多くの図書館では電算化を余儀無くされるであろうが、まず何のために誰のために電算化するのかを、充分時間をかけて討議してもらいたいと思います。

科学研公開例会「科学史」

川合葉子氏（京大・教養部）を迎えて

篠原恵子

（京都大学医学図書館）

科学・技術と学術情報研究グループ（科学研）の主催で、昭和57年7月17日“大学図書館員のための科学史のすゝめ方について”講演が行われた。

現代の生活は、正しい科学知識なしにはなりたない。日常生活、例えば洗濯機等の普及で楽になってきたと言われているが、それをこなす正しい判断が家事労働にも必要になってきており、それはまた、原子力発電等の社会・政治ぐるみの問題につながっている。正しい知識を保障するという事が、国民全体から求められているが、科学者としても、社会と科学の関係を研究する仕事が緊急になっているにもかかわらず、そういう総合科学が成立しにくい状況がある。総合科学をやる場合、図書館が不可決であり、今までとちがった質のサービスが求められることになる。京大においても、「科学史」を専攻する課程がないので、科学史概論を講義する力をつけるには非常に努力しなければならない。国民の生活を擁護する科学ということでは、柴田悦子「現代生活と婦人」（大月書店）中の横田氏の「家事労働の問題」が参考になる。科学を扱う場合、歴史的にどのような風に変化し、生れてきたかを知る事は、興味もあろうし、面白いので、科学史が必要なのだが、「科学史」の本は非常に多くある。科学史という場合、その人の持っている科学観、自然観と結びついて述べられているので、その人の科学に対する考え方を考慮しなければならない。川合氏は労働者のもっている科学性、人間解放の科学観というものが必要であり、人間中心の科学論からみた科学史が必要であると考ええる。（日本科学者会議編「現代科学の展望」

（大月書店）あるものから別のものへと置き換えられたものは発展ではない。大勢の人の考えとか仕事が基盤となって積み上げられ、その結果出てきたものが、発見と称されているが、独占資本側からみるとそう思いたくないようである。通商産業省産業構造審議会編「80年代の通産政策ビジョン」（通商産業調査会）の科学・技術に対する見解にうかがわれる。“図書館とはどういう所か”と聞かれた時、本が並んでいて、すぐとり出せる所と答えたら、それだけのことだが、そうではなくて、並べるまでには、いろいろな人が携わっている。そういう過程をぬきにして、単にとり出せる所という考え方は誤りで、科学は営々と人々が築き上げた文化なのである。こういう事をぬきにして、出来上がった「科学」のどれがよいかを指摘するだけでなく、どう科学が発展し、どう生活にかかわってきたのかを問題にしなければならない。プラグマティズム的な科学観は、トーマス・クーン著、中山茂訳「科学革命の構造」（みすず書房）で述べられているが、川合氏は、道家達将等「20世紀科学の源流」（NHKブックス）の考え方に近い。科学とは本来自然があって運動法則が体系的に究明されていき、知識が深まれば深まる程、人間の発展は保障される。現在の社会がゆがんでいるから、もっとよい社会になれば科学も発展するのであって、自然界の中での相互関係をさす。川合氏の科学史講座では、地球という自然があって、長い期間を経て人間が生じ、科学の出来る条件が必要である事をまず知ってもらおう。アテネの職人都市が出来、神話から自由になった時点で科学が生じ、アリストテレスだけでなく、

その人をとりまくグループが伝播していった記録を残した事が、科学の出来る素地となっている。戦争と科学については、戦争で科学が発展したのではない。直接的に交戦国でなかったとか、ファシズムに対する人々の反対が、自然的参加となって、ファシズムへの反感が科学を発展させたのであって、戦争そのものは何も生み出さない。科学的労働がどういう風に行われたか等を書いてある本を選んではほしい。科学政策の歴史、科学者運動史も科学史の関係に入る。科学政策のことになると、大学図書館も入ってくる。日本科学者会議「科学技術政策史年表」（大月書店）参照。科学は、科学技術として人間生活にかかわっており、その最初は料理 — 家事である。今までの科学という見方からくらべると新鮮である。必読文献としては、エンゲルス「サルが人間になるにあたっての労働の役割」（岩波・大月書店、文庫「自然弁証法」所収）である。公害の話も出てくると、人間の営みが自然を破壊しながら、自然をもかえていく事が分る。こういう一連の考えにたったものとして、富山和子「水の文化史」（文芸春秋）がある。女性が科学的知識をもち科学者になると、こういう本が生まれるのだと考えさせられる本であり、また倉林三郎「粘土と暮らし」（東海大学出版会）は、粘土がどういう風に暮らしの中で使われ、どういう風に作られているか、やさしそうな本で大切な事が分る。科学者もこういう本を書くようにしなければならない。身近で手に入る所から読んでいって、専門的な事に入る方がよい。そういう意味では、岩波科学の本とか、Album of Scienceがよい。特にAlbum of Scienceは図書館で購入してほしい。図書

編集後記

この号から編集者が交替しました。頁数の制約があるため、無い知恵をいくらしばっても大した名案はでそうもありません。しかし、

館員は科学史をやる人に似ている。古いものを一所懸命扱う。ただ、今は新しいものを扱う方が多いらしい。昔、図書館員を尊敬していた。仕事をしながら、専門の事をしておられた。科学史は人々が営々と目立たない仕事の積み重ねとして伝えていこうとしたものなので、古いものが大切。日本の国でどういう風に科学が発展したかを研究する時、どんな本をはじめて使ったかが大切になってくる。今、一番心配しているのは、いらぬ本として処分、あるいは未整理のまま、利用出来ない状態にされるのではないかということ。特に自然科学分野は新しいものを優先されるから。日本に根を下ろした科学史をつくるためにぜひ必要で、図書館員の協力をお願いしたい。最近、科学者の間でも古いものの保存を真剣に考えているシンポジウムも出てきた。（物理・土木・建築学会）。また現在の必要な資料もまんべんなく収集してほしい。研究者は必要な分野のものは勝手に収集しているが、まばらなので、系統的な収集は図書館の方でやってほしいし、政府が発行している統計・刊行物も収集してほしい。図書館員が収集のpolicyを持ってもらう方がよい。図書館は学問の財産と考えている。

偉人、天才、秀才の発見した事項の羅列中心の科学史でなく生活、仕事に視点をあてた科学史、その人のもつ科学観、自然観、生き方の大切さ、科学概論講義をもつむつかしさ、やさしい事から入って専門に導く科学の本の登場、どんなものでも備える図書館の使命の重要性、科学者と共に歩む図書館員への期待等、基本的な事柄をやさしく詳しく話され、深く考えさせられる講演でした。

会員諸氏の声は紙面にできるだけ生かしたく思いますので、どしどし御意見をお寄せ下さい。次号からグループ研究の動向についてもできるだけ紹介するつもりです。（T・S記）